

アフガニスタン版沖縄

アフガン・平和ボランティア

田中泉訳

2014年の米軍撤退はない

私たちは平和を願う、ごく普通のアフガン人だ。私たちには、目、耳、それに愛と悲しみの感情がある。どうかお読みいただきたい。

「米国・アフガニスタン間 恒久的・戦略的同盟協定」に関して、ワシントンポスト紙は[次のように](#)書いている。「2014年以降もアフガニスタンに残る米国の訓練部隊・特殊作戦部隊は、アフガニスタンの基地で生活することになる」。

米国市民の皆さんにご理解いただきたい。オバマが勝とうとロムニーが勝とうと、2014年の米軍の完全撤退はない。「大統領とは皆、戦争を行うものなのだ」の中で、シカゴ・トリビューン紙のスティーブ・チャップマンが[こう](#)書いている。「民主党も共和党もない。あるのは戦争党だけだ」。

アフガニスタンでも同じである。

世界に「銃と墓場の」文化を築くのか？

残念ながら、こんにちの世界におけるすべての大統領や首相は、軍事資金と権力を使って影響力を行使し、自国民と他国民に対して地政学的／経済的な戦争をしかける総司令官兼CEOと化している。

人々は様々な場所から、この現状を変えようと抗議している。人々に犠牲を強いている政治的な嘘に我慢できないからだ。これで「人間の春」がついに産声をあげるとのことか？ そのような春の訪れには長い時間がかかることが知られている。

「米国の新安全保障のためのセンター」のシニア研究員アンドリュー・エクサムは、戦争は収束に向かっていると示唆したオバマ大統領を[批判した](#)。「戦争が収束に向かっているというのは、誤解を招く発言だ。戦争というのは、我々の望みどおりに終わったり始まったりするものではない。アフガン人のために終わったりもしない。アフガン人の傍らで、アフガン人と共に、アフガン人を通して闘い続ける大勢の米国特別部隊の兵士たちのために終わってくれるわけでもない」。

アフガニスタンで唯一、米軍の支援のもとハミード・カルザイが実際に統治している都市、首都カブールは要塞化し、戦闘により慢性的に疲弊している。16歳のアリは失望した。「永続的・戦略的同盟協定」に署名するためにやってきたオバマ大統領が、警戒心からか夜に到着し、下水は溢れ貯水池も枯れ、明かりもともらないカブールの街に忍び込んだからだ。5月1日の朝目覚めて、このニュースを耳にしたアリは、「何だって?」と思った。「自分たちが支配しようとしている人々を、まともに直視することすらできなかつたんじゃないか!」

[永続的・戦略的同盟協定](#)の第3章第6項は“高度な長期安全保障”と題されている。そこにはこうある。

「アフガニスタンは2014年、そして二国間安全保障協定での同意があればそれ以後も、米国の要員に対してアフガニスタン側の施設への継続的な出入り・使用をみとめる。目的は、アルカイダやその子分らとの戦闘、アフガン治安部隊の訓練、その他安全保障上の共通利益を前進させるべく共同決定されるミッションの実施である」

米軍を全撤退させる計画の代わりに、「2014年及びそれ以後もアフガニスタン側の施設への出入りと使用を・・・」。これではまったく「アフガニスタン版沖縄」の樹立計画ではないか。

人間らしい意味合い VS 皮肉な言葉遊び

オバマ政権は利口にも、「米国はアフガニスタンに永続的な軍事基地を求めはしない」という[申し訳てい](#)どの事実に基づく主張をすることで、米国内部の懸念をなだめたのだった。オバマ大統領は前にも、このオーウェル的な言葉遊びのなせる業で「リビアでの戦闘は戦争ではなく、単なる動的な軍事行動だ」と[宣言してのけた](#)ことがある。「リビアにおける米国の活動」と題した32ページの報告書の中でだ。このようにしてオバマは、米憲法、および1973年の[開戦権決議](#)で要請される議会承認を求めずに、60日の期間を超過してもなお、リビアへの介入を継続することができた。

「リビア戦闘は戦争ではない」だって?

「アフガニスタンに恒久的な軍事基地は置かない」だって?

現実には、米国の基地が「アフガニスタンの」基地になっても、2万人もの米国人「訓練士」と特別作戦部隊をそこに収容するということだ。これは議論的となっている日本・沖縄の普天間空軍基地に目下駐留する米軍の人数より多い。また、最近の日本との(かなりもめた)交渉では米軍の一部が撤退した後も駐留を続ける米兵の数が[決定](#)しているが、その倍にあたる。

カルザイは、日本・沖縄の基地における米軍駐留が社会的にも政治的にもひどく不当視されるようになったことに目を向けるべきだ。

いまは米軍の落とす金に満足しているアフガン人も、いつかは品位ある日本人と同様、「アフガニスタン版沖縄」に終止符を打つことを要望してくる可能性がある。カルザイ大統領が自分の名誉を気に掛けるのなら、このことを考えてみるべきだろう。カルザイがもし歴史書に不名誉な名で載りたくないのなら、「日本の鳩山由紀夫首相が、紛糾する沖縄問題を理由に就任後たった8ヶ月で辞任せざるをえなかった」ことも[読んで](#)おくべきだ。

アフガニスタンの野党である統一国民戦線はすでに、戦略的同盟協定がアフガニスタンの現世代および未来の世代から非難されると述べている。

大半の米国市民はアフガニスタンでの戦争の終結を望んでいる。2014年の米軍の完全撤退がなければ残念がるだろう。

米軍は2014年に完全撤退はしない。

2014年に撤退するのは米軍の全体ではない。

2014年に米軍を完全撤退させる計画が立てられたことは一度もない。

「2014年の米軍撤退」なるものは、オバマ流「認識本意の戦争」だ。

我々は米国の友人たちにこのことを伝えるにあたり、何通りの方法を用いなければならないのか？アフガン戦争反対の米国世論が民主的に考慮されるように、友人たちから米国政府に要望してもらえたらと思う。

礼節と、暴力と

アフガン平和ボランティアのシャムスは言う。「我々も、すべての人にとって機能する経済と、安全な環境でのまっとうな生活を望んでいる。我々が毎日安全に学び、働き、帰宅することができるように。米国の特別作戦部隊と無人機では、これを成し遂げることはできない。」

一般的な米国人と同様、一般的なアフガン人も、アフガン戦争が終結することを望んでいる。

しかし、どんな戦争終結の方法が望ましいかについてはいくつかの相違がある。それらの相違はオープンに提示されるべきだ。

一般的な米国人もアフガン人も、礼節を大切にす。しかしどちらの政府もあまりに軍事化してしまったせいで、礼節ある選択肢を提供していない。

米国の特別作戦部隊と無人機を使うというのは軍事的な選択肢であり、アフガニスタンでは前世紀から失敗したことが証明済みだ。礼節を尊ぶ選択ではない。

「1000人の武装したタリバンや米兵が村にいるより、非武装の人道的な米国人教師が一人いた方がいい」とアブドゥライは言う。「パンは食べられるが、銃弾は食べられない。私には、人を殺す方法ではなく、生活の糧を得る方法が必要だ。」

アブドゥライにとって、パンや教育や仕事は防衛だ。真の民間防衛だ。

米軍特別作戦部隊がオバマの指令通りに「仕事を片付け」敵を全滅させることができる、物理的な「テロリストの避難所」などというものは、アフガニスタンにもパキスタンにも、いや世界のどこにも存在しない。

「テロリスト」方式は、アルカイダおよび雨後の竹の子のように出てくるその仲間たちによってのみ採用されている軍事作戦ではない。米国政府も明らかに、その軍事的な姿勢を採用しているのだ。米国国防省の「ジョイント・ビジョン2020」という青写真でも書かれているように、世界規模の「完全な支配」を実現するという米国外交政策の目的を実現するためである。

表舞台からは既に去った英国やロシア、および今やゆっくりと去ろうとしている米国と同様、新興スーパーパワーである中国も同じく、強力な暴力的軍事姿勢を取るであろうことが予想される。

道徳にこだわらない哲学者だろうと、イスラム教徒の「聖戦主義者」だろうと、アウグスチヌス派の「十字軍」だろうと皆、ただアフガニスタンの人々を失望させ、そして殺してきた。その伝統的にとってきた戦略が、あまりに多くの人類を裏切り、殺戮してきたように。

オバマが深夜に「アフガニスタン版沖縄」を認可したことについて、拍手で迎える者もいるだろう。だが、拍手しない側の我々の人間性を尊重していただければと思う。肩章、武器、敬礼、傲慢さ、ステルス機を、そして英語であれタリ語であれ真実への我々の憧れをぶち壊すようなオーウェル式の言葉を、我々は嫌悪する。

オバマがカブールを電撃訪問したときの、あの夜明け前の闇（それは南アジアにおける絶え間ない戦争の「新たな日」の始まりを封印するためでしかなかった）についても、また、カンダハルの外国人居住地に対するタリバンの攻撃（それで登校中の子どもたちが殺された）についても、皆さんが我々の声を聞いて下さることを願う。

この声はあなたの中にもあり、目覚めつつあるのだ。

我々の市民的尊厳を守って下さい
アフガニスタン版沖縄に拍手を送らないで下さい
特殊暴虐部隊を撤収させて下さい
全ての兵士を自国に撤退させて下さい

田中泉は東京に住む翻訳家で、2007年から Democracy Now! Japan, 2010年から Peace Philosophy Centre および Japan Focus に訳文を提供している。